



藪内孝博会長の圃場で調査

# 中国四国土を考える会 夏期研修会

## 土壌断面調査から読み解く土づくり ～よう来んさった、鳥取編～

▶8月23日、24日  
(鳥取県岩美町・鳥取市、八頭町)



情報提供は(有)田中農場の田中里志代表取締役



土壌断面調査のライブ解説の講師は前島勇治氏

中国四国土を考える会(藪内孝博会長)は、去る8月23日(金)、24日(土)に夏期研修会を開催した。鳥取県稲作経営者会議と共催したことから、会員のほかに鳥取県内の稲作経営者も参加し、40名余りの研修会となった。同会では、2017年春以降、土壌学の専門家を招き、「土中環境はモノリスで見て知る」をテーマに土壌断面調査を岡山で2回、鳥根、山口でそれぞれ行ってきた。5回目を迎えた今回は、鳥取県内の2カ所で穴を掘り、調査した。



今回観察した土壌断面。右は岩美町の藪内会長の海拔10m以下の水田。左は田中農場の有機物投入による土づくりを長年行ってきた八頭町のネギ作付け圃場



初日は、岩美町の蒲生川の三角州にある海拔10m以下の藪内会長の水田にて、農研機構・農業環境変動研究センターの前島勇治氏が、故・大倉利明氏の遺志を継いで、土壌モノリス採取とライブ解説を行なった。前夜の雨で水没したものの、ポンプで排水しながらの調査となった。3年前に借りるまでは移植体系の稲作が長年行なわれていた圃場で、一昨年に乾田直播、昨年と今年は大豆「タマホマレ」を作付けしている。作土は10cmながら、少なくとも深さ60cmまでは細い根が伸びていることが確認された。また、深さ30cm以下には地下水の上下動によってできる管状の鉄サビが多く見られ、水はけの良い圃場であることが分かった。

この日は、ホテルに場所を移して、(有)田中農場の代表取締役の田中里志氏から、同農場の経営概要について情報提供があり、その後の情報交換会は深夜まで続いた。

翌24日は、八頭町内の私都川流域の河岸段丘にある田中農場のネギ作付け圃場で調査を行なった。海拔は約70m。表層30cmに黒い土層があり、その下に灰色の層、硬い層、黒泥層、グライ層が続き、長年の有機物の投入により、元々の灰色の土が黒く変わったと見られる。72〜75年の基盤整備で造成されて以来、同農場が行なってきた土づくりの成果がそのまま反映されているようだった。



土壌断面を囲んでの集合写真